

|||||
 卷 頭 言
 |||||

会長の2年間を通して



内 島 俊 雄

2年間、会長の職を勤めさせていただいた。

柄にもないという思いで腰が引けていたところもあったし、とは言っても勤める以上はの思いもあり、多少とも学会の強化に取り組もうともした。

理事会の発言を受けて、理事の若返りを実現しようとし、会員の増強を計ろうとし、本会の法人化の作業とそれに向けての事務局の強化等にも意を注いだつもりである。しかし、思いは何一つとして実現はしなかった。

理事会の若返りは、部分的には実行したが、それだけでは会の運営が成り立たないことを思い知らされ、最終的にはその方針を減速することにした。

これぞ会員増強の妙案と思って実行したことも、少しもはかばかしくない。

法人化の作業は緒に着いたばかり。

そのための事務局の強化は、意に反して後退。最近の半年の事務局の混乱は目を覆うばかりであった。学会員にも多大なご迷惑をお掛けした。この経緯を詳細に述べる気はないが、法人化に向けて、もっと学会らしく、ある程度は判断業務もできる事務局にしたいと思って、私はある人事を実行した。しかし、その人事は完全に裏目に出て、ベテラン事務員が二人相次いで辞職するという事態になってしまった。

昨年暮れからこの3月はじめまで、その穴埋めの人捜しに翻弄されて、「今日の推移を見て明日を判断する」という不安定な日の連続であった。学会業務を停止させるわけには行かない、が最期の防衛線であった。幸い、上村庶務理事の冷静・沈着かつ緻密なはたらきに助けられて、何とかそれを乗り切ることができた。一人のフルタイムと二人のアルバイトの方を得て、今は好い雰囲気です日常業務は遅滞なく進行する状態になった。

それにしても思うのは、「本学会は、まだまだ足腰が弱い」ということである。その弱さを突き詰めれば、つまるところ財政基盤の脆弱さということになる。財政豊かであれば、打つ手の自由度が広がる。学会設立の初期において、諸々の困難があったことを聞き知っているが、当時の会長・副会長、理事や諸委員の方々のご苦勞を、今にして思い知らされたという感が強い。

足腰を強くする方策の一つは、会員増強である。そして第二は、分野の拡大ではなからうか。半導体関係の会員が少ないという問題もあり、更にテリトリーを界面科学にも広げてもよいのではないか、という問題もある。

役員や諸委員の方々をはじめ、会員諸氏の、この方向に向けてのご尽力を切に希望したいと思っている。組織面をも強化して、新しい学問を育てるとともに、国際競争力を育む必要がある。

(筑波大学物質工学系)